

フランス語の長母音と位置の法則

近藤 野里

(名古屋外国語大学)

中舌母音の分布について、20世紀の音声学者たち(Fouché 1935, Delattre 1951, Straka 1981)によって「位置の法則(*loi de position*)」が指摘されている。この法則は、母音を含む音節が開音節（母音で終わる音節）、もしくは閉音節（子音で終わる音節）であるかによって、開口度の異なる2つの母音が相補分布を形成するものである。つまり、開音節では[e, ø, o]の狭母音が、閉音節では[ɛ, œ, ɔ]の広母音が現れる。ただし、位置の法則には例外も見られる。例えば、語末閉音節における狭母音[ø] (*jeûne* [ʒø̃n])および[o] (*paume* [pom])の発音については、少なくとも19世紀末までは長母音の発音が規範的であったもの(i.e. [ʒø̃:n], [po:m])である。また語末開音節における狭母音[e]と広母音[ɛ]の対立もその例外に当たる。最近の音韻研究(Rizzolo 2002, Féry 2003)では、狭母音([e], [o], [ø])は潜在的に長いために開音節に、広母音([ɛ], [ɔ], [œ])は短いために閉音節に分布するという仮説を立てることで、位置の法則に従う分布を音節の種類の問題としてではなく、むしろ長さの問題として扱うものがある。本発表では、中舌母音の分布と長母音消失の通時的変化を追うことで、この「位置の法則」について再考察を行う。